人権教育としての自尊感情育成

―参加体験型学習を通して―

牧野　太一・上原　秀一

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第10号　別刷

2023年8月31日

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第10号　2023年8月31日

人権教育としての自尊感情育成†
―参加体験型学習を通して―

牧野　太一*・上原　秀一**
壬生町立壬生東小学校*
宇都宮大学共同教育学部**

一人一人の人間が尊厳をもつかけがえのない存在であるという考え方が尊重され、守られていく社会を作っていくうえで自尊感情（自分自身をかけがえのない存在として認め、欠点も含めて自分自身を好きになる感情のこと）を高めることは、重要なことである。本稿では、人権教育の一環として、自尊感情を高める手段を研究した。具体的には、参加体験型学習が有効であるかどうか提案授業を通して、分析や検証を行い、自尊感情を高めることにつながる授業の在り方について検討する。

キーワード：人権教育、自尊感情、参加体験型学習

1．提案授業

本授業は日本学校グループワーク・トレーニング研究会著『学校グループワーク・トレーニング3』（2016　図書文化社）の「宝島を脱出せよ」を用いたアクティビティーを中心に行う。このアクティビティーの「ねらい」は、「自分のもっている情報を、言葉によって確実にメンバーに伝える作業をとおして、話合いでの大切な行動・態度に気づく。」とある。しかし、授業者は、このアクティビティーを用いて、子どもたちの自尊感情を高めることができないかと考えた。そのため、授業を行う上で、以下のことについて留意して準備を進めた。

(1) 本時の「めあて」の設定

今回、学習指導案で示した目的は、「グループの成功に役立つ体験を通して、よりよい人間関係を形成するための自尊感情を高めることができる。」である。しかし、今回の学習は、一人一人の子どもたちの活動が、本人が意識しないまま、問題の解決に役立っていて、その喜びを知ることをねらっている。そのため、初めに授業者が考えている目的を児童に伝えてしまうと、子どもたちの学習活動の妨げとなってしまい、活動の面白さも半減してしまうと恐れた。そのため、子どもに伝える「めあて」は、「力を合わせて、難しい課題を解くことができる。」とした。

(2) 成功体験をさせるための教師の姿勢

『学校グループワーク・トレーニング3』では、本時のアクティビティーを「小学校高学年向き」と位置付けている。しかし、今回の目的は成功体験をさせることである。そのため、あえて「中学生向け」のアクティビティーであると伝えることにした。「できたらすごい。」「できなくても仕方ない。」という気持ちにさせ、安心感をもって取り組ませようと考えた。

活動中は、班での活動を教師は見守る形を取り、全体を見渡して、児童の活動状況を把握することに努めるようにした。特に、ルールを誤解していないか、各班のゲームの進度に著しく差がないかについてはよく観察をし、これらの点に関しては、必要に応じて適宜助言をするようにした。

正解の確認は、班ごとに行い、部分正解を認め、グループ全体の成功を大いに褒めるよう留意した。

---

† Taichi MAKINO*, Shuichi UEHARA**: Self-esteem upbringing as Human Rights Education
Keywords: Human Rights Education, Self-esteem,Participatory experiential learning
* Mibuhigashi Elementary School, Mibu
** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
(連絡先：suehara@cc.utsunomiya-u.ac.jp　上原秀一)

時間内に終わらなかった班もできたところまで確認し、あえて全部の正解を発表しないことで、時間後でも、活動を続けたい班は最後まで取り組めるようにした。

(3) 安心してできる環境づくり

導入では、初めにアクティビティーを行う上での「三つの約束」を確認する。尊重（意見を押しつけない)、参加（発言を強制しない)、守秘（個人情報を守る)の三つである。これらを取り上げることで、一人一人を大切にした雰囲気や環境の中で、活動できるようにした。

(4) 準備物の工夫

活動する班は、各班４～５名で編制した。子どもたち全員に、グループへの指示書を配った。指示書に関しては、多くの情報が書かれているので、個人で持っていた方が取り組みやすいと考えた。また、島の地図（白黒)、かぎの絵（『学校グループワーク・トレーニング3』 P54のかぎを拡大したもの)、暗号文、情報カードを配った。これらに関しては、全員に配ってしまうと班で取り組まず個人作業になってしまう恐れがあったため、班で共有した。また、島の地図が白黒であると、海等の境目が分かりづらいため、島の地図を拡大し、色を塗ったものを黒板に掲示した。情報カードは、『学校グループワーク・トレーニング3』を参考に21枚作成した。海路など子どもたちにあまり馴染みがないと思われる言葉に関しては、海を通ってというふうに簡単な言葉に置き換えた。また、漢字には振り仮名を振り、全員がしっかり伝えられるように配慮した。情報カードは、縦書きで文字を書き、複数枚持っても持ちやすいようにした。情報カードに書いてある番号については、つけておくかどうか迷ったが、子どもたちが問題を解決する際、番号をもとに情報を整理することも予想されたため、残しておいた。(実際、半分ぐらいの班が番号をもとに情報を整理していた。)

(5) ルールの工夫

本活動を行う上での約束は次のようにする。

①自分がもらったカードは人に見せてはいけません。
②カードに書かれた内容は、グループの人に言葉でつたえてください。
③制限時間は、今から20分間です。

(日本学校グループワーク・トレーニング研究会『学校グループワーク・トレーニング3』)

制限時間に関しては、初めは20分間で解くのは困難であろうと考え、30分に設定しようとした。しかし、活動時間に30分間使ってしまうと、十分な振り返りの時間が取れないことや早く終わった班の活動意欲が低下してしまうことも予想されたため、20分間とした。ただし、児童の反応や状況に応じて、時間配分の対応を柔軟に行おうと考えた。

また、20分間で解けない班に関しても、部分正解（薬のありかが分かる、洞穴から河口まで出られる等）を認めることで達成感や自己有用感が味わえるようにしようと配慮した。

(6) 振り返りの工夫

振り返りには、振り返りシートを活用する。振り返りシートは、設問を２つ作った。

1. グループの友達は、宝島から脱出するためにいろいろな協力をしてくれました。どんなことをしてくれたか思い出して書きましょう。
2. グループでの話合いを通して、考えたことを書きましょう。

初めに、設問１について時間を取って、ワークシートに記入させる。その後に、グループで意見交流をし、設問２に答えるという形をとることにした。

設問１については、友達から活躍を認めてもらい、それがシェアリングされることで自尊感情が高まることを期待して作成した。記入する際は、机間指導をしながら一人一人の振り返りシートをよく観察し、誰からも感謝されない児童をつくらないように配慮する。その後、設問２に答えてもらい、本時の活動全体を振り返るとともに、学習指導案で示す目的の達成状況を把握しようとした。

2. 実践の分析

授業は令和４年６月28日（火）に、壬生町立壬生東小学校の６年１組、６年２組の児童を対象に行った。以下は、設問１について、ある児童に対する班の友達のコメントである。この班は、約５分間という時間を取り、自分以外全員（３人分）の活躍したところについて書かせた。

なお、授業者が振り返りシートにこれくらい書けると望ましいと考えたものも「子どもに期待したい言葉」として載せた。「子どもに期待したい言葉」は、授業者が授業後に話合いの様子を撮ったビデオを参考にして考えた。

第６学年学級活動（２）学習指導案

１．題材　「宝島を脱出せよ」　学級活動（２）イ　よりよい人間関係の形成

２．目的　グループの成功に役立つ体験を通して、よりよい人間関係を形成するための自尊感情を高めることができる。

３．本時の展開

時間	学習活動（主な発問と予想される児童の反応）	教師の支援、指導上の留意点
5	１．本日のめあてを知る。 ○力を合わせて、難しい課題を解くことができる。	・初めにアクティビティーを行う上での「三つの約束」を呼びかけ、安心して参加できる雰囲気をつくる。 ・考案者は「小学校高学年～」向きに本時のアクティビティーを位置づけている。しかし、今回の目的は成功体験させることである。そのため、あえて「中学生向け」のアクティビティーであると伝え、部分的正解も認めることとする。
5	２．アクティビティー「宝島を脱出せよ」の活動の進め方を知る。	・指示書を読み、内容を説明する。また、約束を読み上げ確認する。質問があれば受け付ける。 ・情報カードは、裏返しのままトランプのように切って全員に配る。
20	３．指示書に従い、カードの情報を交換し合い島の脱出方法をグループで考える。	・終了時間は２０分を目安とする。ただし、児童の反応や状況に応じて、時間配分の対応を柔軟に行う。 ・全体を見渡して、児童の活動状況を把握することに努める。（ルールを誤解していないか。各グループのゲームの進度に著しく差がないか。）
5	４．正解を確認する。	・正解をグループ別に確認する。 ・部分正解も認め、グループ全体の成功を大いに褒める。 ・時間内に終わらなかった班もできたところまでを確認する。
10	５．振り返りをし、本日の活動について振り返る。	・振り返りシート設問１を個人で記入したのち、グループでシェアリングする。 ・お互いの活躍を賞賛し合うことで、自己有用感が高められるようにする。 ・話合いが進まないグループには声を掛ける。 ・児童全員が誰かしらから感謝される状況をつくり、自尊感情を高められるように配慮する。

・たくさんの情報を出してくれた。(児童A)
・たくさんの情報をまとめてくれた。(児童B)
・地図の案内をしてくれた。(児童C)
(子どもに期待したい言葉)
・班全体をよく見て、みんなにアドバイスをしていた。
・説明が上手で、話している内容が分かった。
・友達の話をよく聞き、しっかり自分の意見を言っていた。
・河口に関係ある情報を良いタイミングで伝えてくれた。

設問２に関して、児童の振り返りの一部を挙げる。

・友達といっしょにやって、面白かったです。難しかったけれど、楽しかったです。
・友情が深まりました。
・みんなで協力して、わからないことが解けてよかった。
・みんなで協力すれば難しいこともやり遂げられるということが分かりました。

3. 実践の考察

実施した後、話合いの後の振り返りシートを分析してみて、次のような問題点を見出した。

(1) 振り返りシートの記述が、全体として大雑把な内容記述が多い。(設問１)

原因としては、次のようなことが考えられる。

①振り返りの時間不足

５分間という短い時間で自分以外の３人もしくは４人の活躍を書くということは、子どもたちにとって難しかったのではなかっただろうか。

②思考の切り替え

子どもたちは、一生懸命アクティビティーを行った。すなわち、「情報をもとに島を脱出すること」に集中していた。しかし、振り返りでは、「友達の活躍を考えて書く」という別の課題に切り替わり、子どもたちも思考の変換をしなくてはならなくなった。

③事前に伝えなかったことによる難しさ

子どもたちには、事前にこういった振り返りをすることを伝えていないこともあり、困難のある課題だったのではないだろうか。そのため、回答が具体的な内容でなかったり、同じような内容になってしまったりしたのではないだろうか。活動をまとめるにあたって、授業者自身で、振り返りで期待したい子どもの言葉を想定して書いてみた。２クラス９名の児童について書くのに40分間の時間を要した。

授業者自身は、ゲームに参加せず、最初から客観

的な視点で分析できた。また、話合いを言語に起こしたものを用いて分析したので、何度も読み返すこともできた。言わば、子どもたちが行ったことより、恵まれている条件でやっても40分かかったのである。この活動を子どもたちが5分でやることには、無理が生じてしまうのではないか。解決策としては、班の自分以外全員の活躍を書かせるのではなく、隣の友達のみに集中させて記入させてはどうかと考える。隣の友達に限定することで、子どもたちの使うエネルギーも一人に集中することになり、内容もより具体的になることが期待される。

方法としては、以下のようにする。

a　ワークシートに隣の友達の活躍を書かせる。

教師は巡回をし、全員が書けているかを確かめ、書けない児童にはアドバイスをする。振り返り時には、自分の持っていたカードをオープンさせ、なるべく活躍を具体的に書くように指示をする。より具体的な言葉の方が、抽象的な言葉よりも嬉しいと感じるであろう。

b　班で書いたことを発表する。

発表をする時にも、「どんな」ことをがんばったかを伝えるように意識させる。また、発表者以外でもその他にも気付いたことや感謝したいことがある児童には、その場で伝え合う形式をとるとよいのではないか。

(2) 振り返りシートで自尊感情について、触れた児童が少ない。(設問2)

今回使ったワークシートでは、設問2で「友達との話し合いを通して、考えたことを書きましょう。」とした。授業者の意図としては、自尊感情の高まりについて記入してもらいたかったのだが、子どもたちのワークシートを見ると、自尊感情について触れられたものが少なかった。

原因としては次のようなことが考えられる。

a　児童に示す「めあて」の設定の仕方

児童のワークシートには、どちらかというと、協力・友情について書かれたものが多く見られた。理由としては、今回の児童に示した授業の「めあて」が「力を合わせて、難しい課題を解くことができる。」と設定したことが考えられる。この「めあて」を設定したことで、「力を合わせる」ことに重点がいってしまったのではないか。

b　振り返りシートでの発問の仕方

設問が「友達との話合いを通して、考えたことを書きましょう。」であった。質問が具体的でなかったため、活動の時の様子に子どもたちの思考が行ってしまったのではないか。そのため、自分の活躍を認めてもらった気持ちについての記述が少なくなってしまったのではないか。

解決策としては、「友達に活躍をほめられて、どんな気持ちでしたか。」とストレートに聞く。そうすることで、こちらが意図していた回答が得られたのではないかと考える。

4. 成果と課題

参加体験型学習を通して、新たな自分を理解したり、他者と協力して成功体験をさせたりすることは、自尊感情を高めるための一つの手立てになり得ると言える。そして、こうして高まった自尊感情は、自他の人権を尊重することにつながる。活動にあたっては、準備物やルール、振り返りの方法等、児童の実態に合わせて、またあらゆる可能性を想定して実践していかなければならない。教師の言葉かけ一つで、活動全体に大きな影響を与えてしまうこともある。そして、やればどの子も同じように高まるとは限らない。けれども、その先に豊かな自尊感情が育つかもしれないという期待をもって行うことに意義はある。また、基本的自尊感情は、一朝一夕で高まるものではない。学習を行うに当たって考慮した視点事項は、本時の活動だけで終わるのではなく、教育活動全体を通じて継続して行っていく必要がある。また、参加体験型学習は、特別活動の年間指導計画に位置付けて、年間を見通して取り組んでいくとより効果をなすのではないか。

今後の課題は、まず学校の特別活動の年間指導計画を見直して、効果的に自尊感情を高めることが出来るような参加体験型学習を考え、実践し、共有を図ることである。また、本研究を通して、教師の対応の仕方は大きく児童に影響を与えることを改めて痛感した。今後、ますます人権教育に関する知見を広め、自らの人権感覚を高めていけるよう研修に励みたい。そして、児童一人一人が自分の存在を大切にし、他者の存在をも大切にしていけるよう努めていきたい。

引用・参考文献

[1] 日本学校グループワーク・トレーニング研究会著『学校グループワーク・トレーニング3』(2016 図書文化社)

2023年3月31日受理

Self-esteem upbringing as Human Rights Education

Taichi MAKINO, Shuichi UEHARA